氏　　名	萩原　伸哉
学 位 の 種 類	博士（医学）
学 位 記 番 号	甲第５３８号
学位授与年月日	令和２年３月１９日
審　査　委　員	主査　教授　　北垣　一
	副査　教授　　谷戸　正樹
	副査　准教授　　平野　章二

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

症候性硬膜動静脈瘻(sDAVF)は稀少疾患で多彩な臨床症状を呈する。脳皮質静脈逆流があると、頭蓋内出血や静脈梗塞など重篤な症状を呈することがあり、診断遅延が病態の悪化を招くことになる。申請者は外科的治療介入を行ったsDAVF患者20名の、発症から診断に至るまでの過程を後方視的に調査し、診断遅延に影響する因子を検討した。対象患者の発症日から診断確定日(Dx)までの種々の因子を調べたうえで、通常診断群(70日以内に診断確定)、診断遅延群(診断確定まで71日以上)の２群間で比較した結果、初診医がいかに早期に2次医療機関に紹介するか(p=0.021)、いかに早期にMRI検査を施行するか(p=0.0043)が有意の差があり、sDAVFの早期診断には重要であった。
また、眼症状患者7名を対象に、発症から診断まで診療医師の医療圏別に平均診察日数を算出すると、医療充足区=14.1日、医療非充足区=84.4日と、医療非充足区で平均診療日数が長く(p=0.0015)、sDAVFの診断遅延が生じやすいと考えられた。
本研究の結果はsDAVFの診療に重要な知見であり、学位に値すると考えた。